受け継ぐ記憶

鈴木　達也
福屋研究室

設計趣旨

2011年3月11日の東日本大震災によって、私の住んでいた家は流失した。それまであった風土や歴史、生業、生活の面影がすべてが失われた。

本計画は、復興住宅（自邸）の実施設計を想定した、設計と近隣住戸とのコミュティ形成の提案である。
新しい生活の場では、住む家も、環境も、以前とは異なるため、従前地の記憶や近隣住民との距離感を継承する事が求められた。

要望のほとんどは庭や外部空間に関する要望だった。

りんごの木を植えたい。

柿の木を植えたい。

桜の木を植えたい。

栗の木を植えたい。

小さくてもいいから畑がほしい。

庭は出来るだけ広い方がいい。

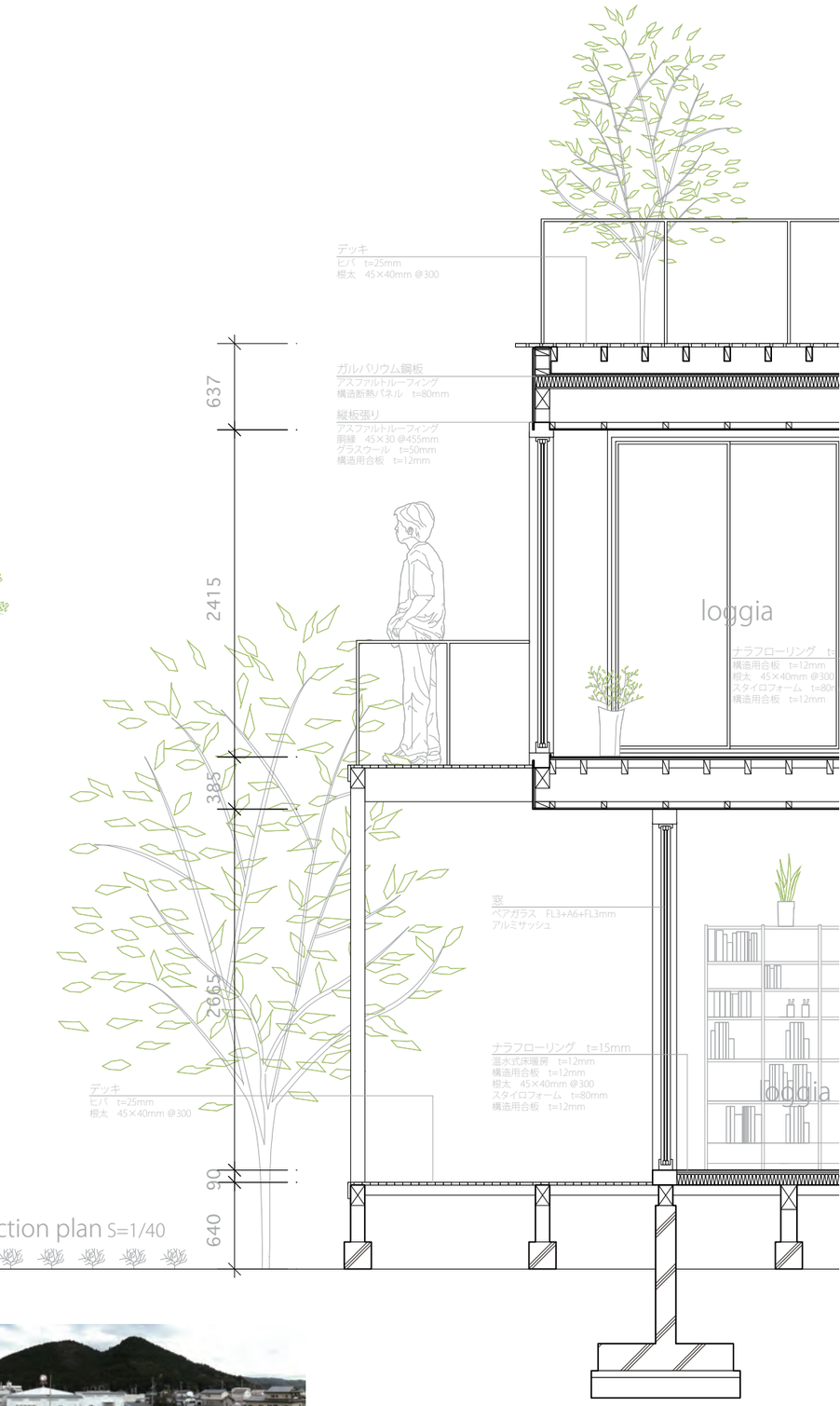
従前地に比べれば半分にも満たない敷地だが、庭を主体的に捉え、さらに庭を介したコミュニティの形成を目指す。

plan S=1/120

diagram

要望を聞く中で、庭に対する思いが強い事を感じた。敷地面積は従前の半分程度であったが、それを感じさせず庭を主体的に捉えられるような、配置計画が求められた。そのため、まず庭をポジティブに捉え要望にあった、りんごの木、栗の木、桜の木、畑等を配置した。

配置した木々の間を縫うように、住戸ボリュームを配置する。ボリューム群の中心を「内庭」とし、住居の中心のリビング空間でありながら、庭の役割を持ち、「内」と「外」の中間的な役割を果たす。各住戸ボリュームは内庭を含めて最低３つの庭を見る事が出来る。



section plan S=1/40

schedule

・東日本大震災
・土地選定
・敷地視察
・宅地確定
・敷地調査（1回）
・要望確認（1回）・住民間会議
・敷地調査（2回）・要望確認（2回）・敷地調査（3回）
・提案（1回）
・工務店打ち合わせ
・提案（2回）
・住民間会議
・提案（3回）
・工務店打ち合わせ
・工務店打ち合わせ
・着工
・基礎工事終了
・上棟式
・竣工
・入居

03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12

2011　2012　2013

25
2007年度
建築学科
卒業研修
報告集
東北工業大学